

史跡興福寺旧境内

興福寺鐘樓の発掘調査

現地見学会資料

場所:法相宗大本山興福寺境内

日時:令和2年9月28日 11~15時

概要

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめ(8世紀前半)に、平城京左京三條七坊の地に建立した藤原氏の氏寺です。奈良時代から中世を通じて、たび重なる火災に遭いながらも再建を繰り返し、中金堂院を中心とする大伽藍を誇りました。興福寺では「興福寺境内整備構想」(1998年)に基づき、寺観の復元・整備を進めています。奈良文化財研究所では1998年以来、中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなっており、今回、鐘楼地区について、規模と構造を確認するための発掘調査を7月よりおこなっています。

鐘楼基壇全景(北西から)



袴腰基礎の抜取溝 (北西から)

創建時からの基壇上では四周を巡る素掘りの溝を検出しました。鐘樓の初層を覆う袴腰の基礎を抜き取った痕跡と見られます。



たび重なる罹災の痕跡

基壇西側には炭層や焼土が幾重にも重なり、基壇西面北部に残る羽目石は、複数回被熱した痕跡をとどめています。



室町時代に据え直された羽目石

基壇東面では、室町時代に基壇縁に新たに積み土を行い、基壇外装の羽目石を据え直して大きく改修をおこなった痕跡が認められました。

成果

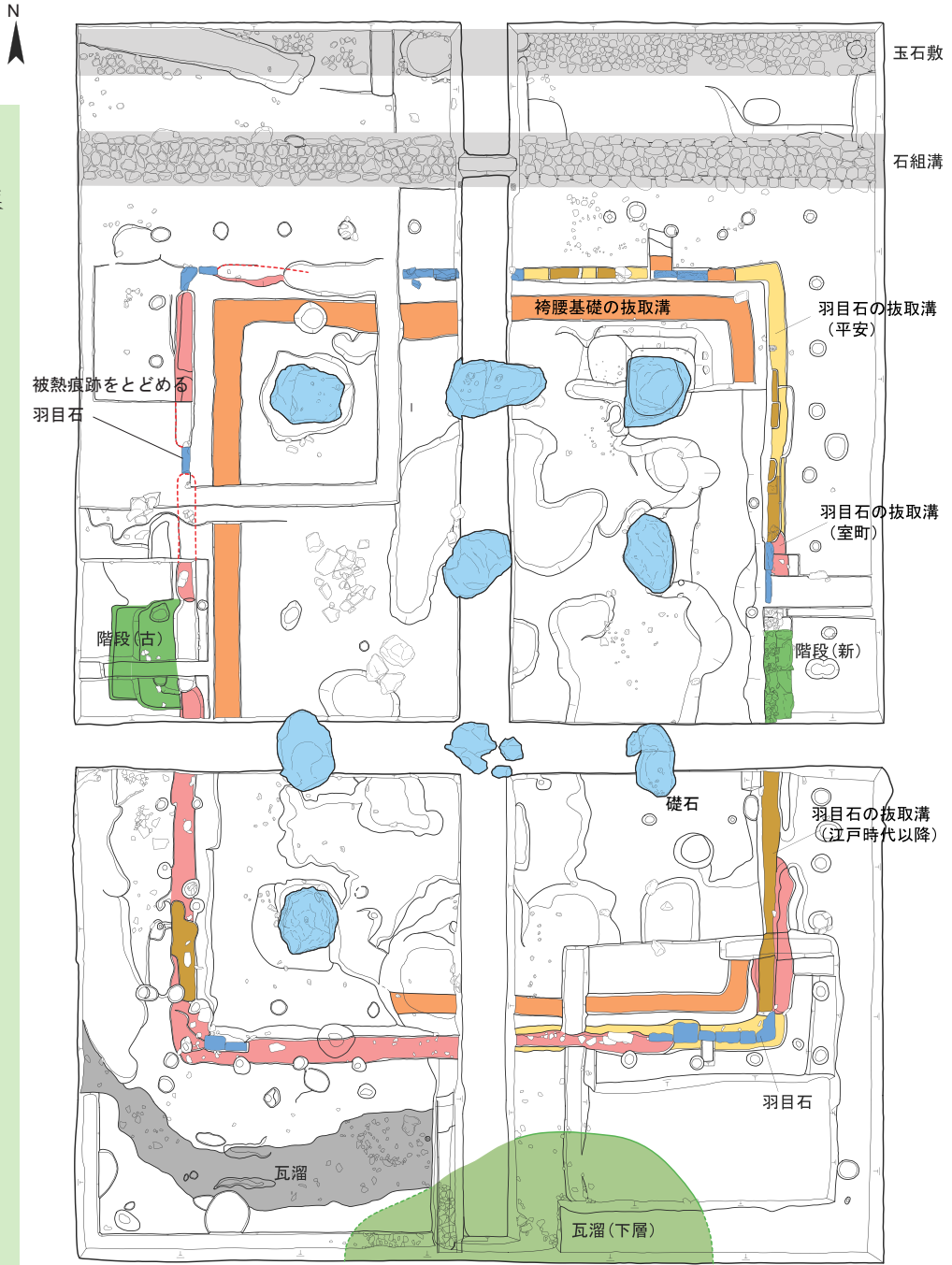
① 鐘樓の創建時及び再建時の建物規模と構造が判明

鐘樓の基壇が良好な状態で残存しており、創建当初の建物規模と構造を確認できました。平面規模については桁行3間(約10.1m、34尺)×梁行2間(約6.5m、22尺)で経蔵と同じであり、これまでの中金堂や南大門などの調査成果と同じく、たび重なる再建に際してもその規模を踏襲してきたことがわかりました。

また、袴腰をもつ構造であった可能性が高いことが判明しました。興福寺の縁起をまとめた文献『興福寺流記』には鐘樓の規模が二通り記述されており、その理由が課題となっていました。今回、袴腰の基礎の抜取溝をはじめ検出したことで、この二通りの記述は柱位置での平面規模と、袴腰下端の平面規模を意味していると解釈できます。袴腰をもつ鐘樓は、これまで平安時代後期以降のものが知られていましたが、今回の調査により、奈良時代の創建期にまで遡る可能性が高くなりました。

② 鐘樓の再建工事の様相が判明

たび重なる焼失を受けて、少なくとも平安時代・室町時代に基壇外装の改修をおこなっている様子を確認しました。また、室町時代の再建に際しては、それまでの焼失と再建で基壇周囲に繰り返す整地をおこなったために低くなった基壇高を補うため、新たに基壇土を積み足して補修するなど、大幅な改修工事をおこなっていることがわかりました。



鐘樓地区 遺構平面図

0 5m